紅よりも紅

松隈義勇

以前に山桜と枝垂桜について書きましたが、このごろは白花の桜に惹かれています。

武蔵野の多摩湖の辺りに杖を曳いたとき、まわりの山桜などがまだ開くより前に、その群から離れた場所で開花していた桜が目に入りました。大きな木で、ゆったり伸ばした枝々に春の雪より美しい花をいっぱいつけて、まるで天降った仙女でした。それから一昨年岐阜県の霞間ケ渓という桜の名所に行ったとき、谷の両側を彩る山桜の間にひっそりと白花の桜が潜んでいるのを見て、息をのみました。

その後こういう白い花の桜には時折気がつきます。伊豆や湘南にも白花の桜はありますが、これは伊豆大島原産の大島桜らしく、うす緑の若葉がまじり、梨の花みたいに緑っぽくて、さびしい感じです。

私が言う白花の桜は、枝をひろげた木の形や咲きぐあいなどが染井吉野に似ています。が、染井吉野の華やかさを内に秘めて、匂い深く、寂かに、幽かに、そして妖しく、この桜は独り、白々と咲き盛るのです。

その一株が月光のもとにしんと立って、ひとひらふたひら散りそめている光景を想うと、私の魂はあやしくふるえます。

そういえば、あの奥美濃の日本一の名桜淡墨桜も、白花の彼岸桜なのです。

昔から花紅葉といわれる通り、桜に並ぶ秋のみものは紅葉でしょう。思い出の中の紅葉を探ってみますと、まずみちのく、八甲田の山なみを抜けて十和田湖へ行く途中でした。紅・黄、濃淡と色さまざまの雑木の紅葉が、碧瑠璃色の小さな沼を深々と抱いて、匂うような錦を織っていました。もう一つは京都洛西の高雄。この紅葉の名所は全山楓もみじが燃え立って、下行く人も赤々と染まるくらいでした。紅葉はやはり楓が一番のようですね。

紅葉の重なりふかみ夕日かげ透りなづみて紅よりも紅　木下利玄

利玄は大正の歌人です。夕日の光を透かした楓紅葉のすごいような赤さを「紅よりも紅」とはよく言い取ったものです。

それにしても、植物の生きるための機関である葉がその生命を終ろうとする間際に、神はなぜこの不可思議な、神秘な美に身を装わせるのでしょう。いったい、あの赤さは何なのでしょう。

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

現代の俳人三橋鷹女の句です。夕紅葉の凄じい赤さに引かれて、女の性の中の鬼女が立ち顕われるのでしょう。謡曲の『紅葉狩』は、燃え立つ紅葉の中で、美女が鬼の本性を顕わします。

深まりゆく夕闇に今しも沈みこもうとする紅葉のゆゆしい紅を見たことがありますか。その時刻、紅葉の林に独りいたら、誰しもそれこそ妖魔のとりこになりそうな思いがすることでしょう。

秋で赤いというと、どうしても言わずにいられないのが彼岸花です。秋晴れの田園をなつかしむにつけて、農村の畦道や堤などを真赤に彩る彼岸花が目に浮んできます。中国渡来のこの花は、梵語に由来する曼珠沙華という名が、音も文字もいいので、愛されます。

つきぬけて天上の紺曼珠沙華　山口誓子

つきぬけるような秋空の下に、つきぬけるように咲く真赤な曼珠沙華、目がさめるような対照です。

彼岸花というのは、見れば見るほど奇妙な禍々しい花です。葉はなくて、花茎が土からぬーっと伸び出て、その先に細い真赤な反った花弁と長い長い蘂をもった花が数個開きます。花期は短くて、花火を見たように消えます。そういう奇妙な姿をもっているうえに、死者の霊が来るとされる彼岸を待って必ず咲き、しかも墓場を好みます。それで、死人花とか幽霊花とか葬礼花とか狐花とかいって忌み嫌われます。それやこれや、この世と冥界との境に咲く魔の花のようにも見えてきます。

私は昔は清く澄んだ秋の象徴と思ってなつかしんだのでしたが、今では反対に暗い妖しげな美しさにたまらなく惹かれます。

春ける彼岸秋陽に狐ばな赤々そまれり　木下利玄

ここはどこのみち

やはり利玄の歌。夕日に真赤に染まった彼岸花の中にいると、子供の頃のように狐にばかされたみたいな気持になる、そこを詠んでいます。「通りゃんせ」という、あの少々怖い童謡の一節を想わせる字余りの言葉を末尾に置くことで、メルヘン的に不気味な雰囲気をもりあげているのです。

もっと不気味なものに、北原白秋の「曼珠沙華」という詩があります。

GONSHAN GONSHAN 何処へ行く／赤い、御墓の曼珠沙華、／曼珠沙華、／けふも手折りに来たわいな。（GONSHAN は良家のお嬢さんをいう方言）

と始めて、血のような、墓場の花は亡き児の年の数と同じ七本で、摘むとそばから開くという。

GONSHAN GONSHAN 何故泣くろ。／何時まで取っても、曼珠沙華／曼珠沙華、／恐や赤しや、まだ七つ。

官能にじかにひびく不気味さ。

彼岸花が消えると、芒の季節が来ます。芒の銀は日があたると金になります。波うちながらはてしなく、魂を遠くへあこがれさせます。時雨が来ると、さびさびとして身も世もあらぬさびしさに沈ませます。芒も、秋の花々もはなやぎとさびの美との両極の間に揺れるのです。

対照的な二つの美を併せ持つものが私にはとりわけ美しく思われます。その両極の美が強ければ強いほど、それも暗い方が強ければ強いほど、一層深い魅力を感じます。